

1 章

桂枝湯類

① 桂枝湯の適応証

桂枝湯は太陽病中風を治療する主方である。太陽中風は風邪の外襲によって起こるもので、太陽病提綱証の上に、さらに発熱・汗出・悪風・脈浮緩などの証候が現れたものを太陽中風証とよんでいる。近代医学の「脳血管障害」の中風とは別のものである。

風は陽邪であり、これが表を犯すと、これも陽である衛氣と相い摶つことになり、まず発熱が現れる。そして発熱は急速にはっきりと現れる。これは悪寒を特徴とした太陽傷寒証と異なる点である。衛気が風邪によって傷つけられると、肌表を護り汗腺の開閉を調節する機能が失調する。これに風邪の絶え間ない影響が加わるので、營気は内を守ることができなくなり、「自汗出づ」の証候が現れる。ただし中風の汗出づは、流れるように発汗するわけ

ではなく、皮膚がわずかに湿り、手をあてて発汗がわかる程度である。

汗が出ると肌の腠理はさらにゆるみ、衛氣は汗とともに排泄されてしまう。その結果として脈象は緩脈となる。張仲景は第12条でこの証候を「陽浮にして陰弱」と述べ、非常に具体的なうまい説明をしている。これは軽按すると余力があり、重按すると無力な浮で緩弱な脈象である。

「翕翕として発熱し」、「淅浙として惡風し」、「嗇嗇として惡寒し」は、それぞれ衣服を厚着して発熱している状態、水をそぎかけられて寒がっている状態、そして寒さのために身体をぢぢめている状態である。同時に風邪のために肺の宣發作用と胃の下降作用も障害され、肺気が不利となれば鼻鳴が起り、胃気が上逆すれば乾嘔が起る。

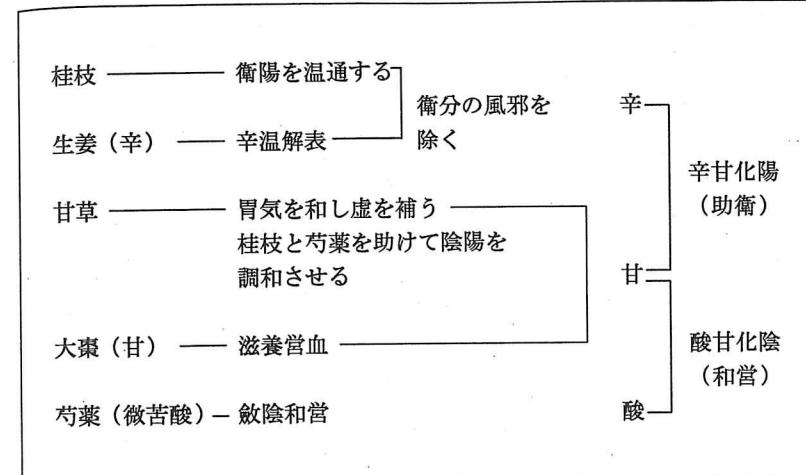
太陽中風の病理は「營弱衛強」の4字に概括することができる。「營弱」とは、衛陽の固摶作用の失調によって營陰が外に泄れることであり、正気不足の一面を反映している。「衛強」とは、風邪が衛分を犯していることを指し、邪気が盛んな一面を反映している。要するに、風邪の外襲によって營衛の調和が失われることが、太陽中風証の最も基本的な病理特徴である。

太陽病の中風証は桂枝湯で治療するが、桂枝湯は太陽中風証にだけ用いるわけではない。例えば始めは太陽傷寒証であって、発汗や瀉下の治療を行った後でも表邪がなお去らない場合や、あるいは発汗によって表邪は去ったが、再び風寒に襲われて表証が現れた場合などは、いずれも桂枝湯を再び用いて解表することができる。

これらの場合は、始めは傷寒であっても、すでに発汗や瀉下の治療を行った後なので、もし表証がなお残っていても、再び激しい発汗法を行うのは不適当である。緩和な桂枝湯を用い、解肌发表して營衛を調和させれば、発汗によって表邪を去らせても、正気を傷つける恐れはない。第57条にも「傷寒、発汗して已に解し、半日許りにして復た煩し、脈浮数なる者は、更に発汗す可し、桂枝湯に宜し」とある。

さらに次のような場合もある。ある病人の内臓には何の異常もないのに、

【桂枝湯】



効能：解肌発汗去風・調和營衛

主治：太陽中風証

治療目標：発熱・汗出・惡風・脈浮緩

ときどき汗が出て発熱を伴うこともあるが、これはどのような原因によるものであろうか。これは「衛氣和せず」、「衛氣營氣と共に譜和せざるの故に爾り」ということになるのである。つまり、病人の營氣は和していても、衛氣が和していないで營氣と密接に協力することができないと、營衛がそれぞれ勝手に行動し、衛氣は外を固めることができなくなり、營氣は内を守ることができなくなる。その結果として「常に自汗出づ」、あるいは「時に発熱し、自汗出でて、愈えず」の状態となる。このような太陽中風ではない場合でも、また「臓に他病なし」の營衛不和の証であっても、桂枝湯を発病前に服用させて汗を取れば、營衛を調和して治すことができる。

桂枝湯は、桂枝・苓藥・炙甘草・大棗・生姜によって構成されている。方

中の桂枝は衛陽を温通させ、これに味辛の生姜を配して衛分の風邪を除く。芍薬は味は苦酸で陰気を収斂し營氣を和し、これに味甘の大棗を配して營陰の虛を滋養する。甘草は胃氣を和し虛を補い、桂枝と芍薬を助けて陰陽を調和させる。以上の5薬は辛・酸・甘などの味を含んでいて、辛甘は陽に化して衛氣を助け、酸甘は陰に化して營氣を和する。ゆえに桂枝湯は營衛を調和する効用があるのである。

本方を服用する際には、服用後に熱い粥をすすり、布団をかぶって温まることが求められている。これは、体内に穀氣を充実させて、発汗によって衛分の邪を駆除する本方の作用を助け、同時に汗の源である津液を補って營陰の虛を補うためである。

柯琴は桂枝湯を評価して、「本方は張仲景の群方の さきがけ 魁であり、滋陰和陽、調和營衛、解肌發汗の総方である。およそ頭痛發熱、惡風惡寒、脈は浮にして弱、汗自ずから出づる者は、何經にかかわらず、中風・傷寒・雜病を問わず、すべて本方を用いることができる。もし、妄みだりに發汗させたり、妄りに下したりして、しかも表証が解さない者は、やはり本方を用いて解肌すべきである。もし、頭痛・發熱・惡寒・惡風・鼻鳴・乾嘔などのうち、ただ一証でも見られれば本方を用いてよい。必ずしもすべての証がそろわらなくてもよい。ただ脈弱と自汗が主要な証である」と述べている。

桂枝湯は2方向に対して調節的な作用を行う。發汗させて止汗し、發汗によって正氣を傷めず、止汗によって邪氣を留めない。外には營衛を調和し、内には氣血を調和する効用がある。特に本方は中焦脾胃の陰陽を調和する作用を主としているので、氣血と營衛の不和を調節することができる。桂枝湯組成の5薬のうち、生姜・大棗・甘草は料理の材料であり、脾胃を健やかにする作用がある。さらに桂枝の芳香は食欲を増進し、通陽・理氣の効果がある。本方は古いにしへの『湯液經』の名残りであるか、あるいは伊尹が作ったものではなかろうか。

『傷寒論』113方の中に桂枝を含むものが41方あり、桂枝を加減するも

のが29方もある。臨床では桂枝湯を応用する機会はかなり多いので、理論上の探求を進めるだけでなく、臨床実践と結合して研究しなくてはならない。以下に症例を記して桂枝湯臨床使用の参考に供する。

② 枝湯の臨床応用

1. 常に発熱して自汗が出る

△症例△ 李○○、女、53歳

毎日2~3回も発熱して發汗する。發病以来すでに1年がたっている。飲食・大小便は正常。以前に陰虛發熱として治療を受けたことがあるが、服用した20余剤はすべて無効であった。脈は緩軟、舌質は淡で舌苔は白であり、營衛不和の証と弁証した。そもそも營衛は陰と陽である。營衛が調和していれば、營陰が衛陽を濟うので、發熱しそうになんしても發熱しない。衛陽が營陰を護るので、發汗しそうになんしても發汗しない。いま營衛が不和となり、両者が助け合わないので、時々發熱して自汗が出るのである。

治療は營衛を調和して陰陽を調えればよい。桂枝湯原方を用いたところ、服用後に微汗が出て治癒した。

△症例△ 20年前、私は京西礎区で中医学部学生の臨床実習をしていた際に、たまたま風寒に罹患した。証は、發熱して全身に發汗した。暑苦しかったので衣服を脱ごうとしたところ、こんどはぞくぞくとさむけがして、鼻水が流れて止まらなくなった。全身に違和感があり、時々乾嘔が起り、脈を診ると浮緩であった。これは太陽病の中風証で

あると自分で診断し、桂枝湯原方を用い、法則どおりに粥をすすつて発汗させたら全快した。これによつて『傷寒論』第2条の「太陽病、発熱し、汗出で、悪風し、脈緩なる」の叙述が、桂枝湯の証とぴったり符合することを身をもつて再確認した。

2. 導麻疹

△症例△ 男、60歳

導麻疹にかかり、痒みが激しく、数カ月も治らない。脈は浮で緩、汗が出て悪風し、舌苔は白くて潤っている。

弁証 風邪が肌腠に止まり、營衛が失調して発疹したのである。

治法 駆風、栄衛の調和。

処方 桂枝湯

服用後に粥をすすらせて発汗させたところ、痒みは止み、発疹は消え、全身から皮膚が落屑して治った。

3. 偏沮¹⁾

△症例△ 孫○○、男、39歳

常に左半身から発汗するが、右半身はかえって汗が出ないで、その境界ははっきりとしている。脈は緩でやや浮であり、舌苔は薄白である。

弁証 『素問』陰陽應象大論に曰く、「左右は陰陽の道路なり」と。患者の脈は浮で緩であることから、虚風が經にあり、營衛が不調和となり、身体左右の氣血が不和で、陰陽が分離して発生したものと考えられる。

治法 発汗により解肌〔肌表の邪を解除〕し、陰陽を調和し、氣血を調え

る。

処方 桂枝湯

服用後に粥をすすらせて微汗を取つたところ、本症はすっかり治癒した。

【訳注】

1) 偏 沮——身体の患側は無汗で、健側に発汗する症状。

③ 桂枝湯の加減応用

桂枝湯の加減応用は、『傷寒論』には加味桂枝湯と減味桂枝湯および加減桂枝湯の3種が記載されているだけである。以下にこれを分類して述べる。

1 加味桂枝湯

1. 桂枝加桂湯

本方は、桂枝湯の桂枝を増量したものである。本方は、焼針で発汗させたが、針をしたところから寒邪が入り、その部位が腫脹して発赤し、奔豚の気が下腹から胸に上衝するなどの証を治療する。

△症例△ 崔○○、女、50歳

症状は非常に奇妙なものであった。気の塊が内踝から大腿内側にそつて上行すると感じ、下腹部にいたると腹が張り、心胸部にいたると呼吸が促迫して動悸が起り、頭部からは冷汗が出る。しばらく